平成２４年３月１２日
府立能勢高等学校
校長　真鍋　政明

平成 23 年度　府立能勢高等学校　評価報告書

１　めざす学校像

連携型中高一貫教育及び総合学科教育を基盤に、小規模校のメリットを最大限に活かし、将来の国際社会を担うリーダーや能勢地域を支える有為な人材の育成をめざし、子どもたちに時代の中を力強く生き抜く力を育む。

（１）「確かな学力の育成」
基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに、これらを活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力などを身に付け、主体的に学習に取り組む態度を育む。

（２）「規律・規範の確立と豊かな心の育成」
生命と人権、自然と環境を大切にする態度やグローバルな感性を育むとともに、自らを律することができる規律・規範を身に付けさせ、心身の健やかな成長を支援する。

（３）「キャリア形成」
豊かな勤労観や職業観を身に付けさせるとともに、将来の夢や目標を持ち、進路を自ら選択・決定する力や、チャレンジ精神を育む。

（４）「家庭・地域とのつながりのある学校づくり」
学校・家庭・地域とが一体となって教育コミュニティを構築し、地域や生徒・保護者のニーズと期待に応える教育活動を推進する。

２　学校教育自己診断における結果と分析・学校協議会における提言内容

学校教育自己診断の結果と分析 ［　平成２４年　１月　実施分　］	学校協議会における提言内容
生徒結果 ・能勢高校に入学して良かったと思う生徒が昨年に比して少なからず減少した（マイナス１９％）。２年生が３６％にとどまったことが影響した。 ・「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」等を通じたキャリア教育が自分の将来設計に役立つと思う生徒が４６％（昨年比マイナス１７％）、またそれらを通じ発表する力や研究する力がついたと思う生徒が４０％（昨年比１３％）に留まった。現在の「産社」「総学」のあり方を、生徒自身がテーマや課題を設定し、その解決を図るかたちにするなど、生徒が体験的・主体的に学ぶことができるようにする必要がある。 保護者結果 ・８９％が子どもと将来のことを話し合う良好な親子関係であり、８５％が子どもの基本的生活習慣について注意している。 ・昨年に比して、能勢高校が地域から信頼される学校であるという回答と、子どもを能勢高校に入学させてよかったという回答がそれぞれプラス１０％、プラス８％増加した。 教職員 ・教育課程の整備や、放課後や長期休業中の講習、キャリア教育、国際交流の指導などは１００％の教員が肯定的に評価している。また、学習の到達度や意欲の低い生徒への指導、個に応じた進路指導、生徒のプレゼンテーション能力の向上、教育目標を踏まえた教育活動の実践なども９０％以上が肯定的に評価している。 ・生徒の不必要なアルバイトの抑制や、小規模校、中高一貫教育校としての特徴を活かしたクラブ活動のシステムづくりについて、肯定的評価が昨年同様２０％以下に留まり、改善されていないことが課題である。	**第１回（6/16）** ○生徒の生活実態を示す各種調査結果について ・前年度に比べて、考査前の学習開始時期が早く、勉強時間が長くなっており、学習意欲の喚起が実を結びつつあるとは思うが、まだ十分でない。保護者と協力して子どもの家庭での学習習慣の確立を図ることが必要である。 ○生徒の中退について ・近年中退生徒数が増加傾向にある。連携中学校の３年生のみならず、２年生にまで体験授業を行うなど、中学生が事前に能勢高校を理解できるよう取組んではいるが、十分ではないようだ。より一層の中高の連携を進められたい。 **第２回（10/20）** ○授業参観をおこなって ・授業に集中していない生徒が一部にいた。本人の努力不足もあるかもしれないが、学ぶ楽しさを実感させる授業づくりにさらに取り組んでいただきたい。 ○観光甲子園、ユネスコスクールについて ・能勢町の支援もあり、大きな成果をあげた。今後もこの取組みを継続発展させるべきである。 **第３回（3/8）** ○学校教育自己診断結果について ・「能勢高校に入学して良かった」と考える生徒の割合は低かったが、保護者は「入学させて良かった」と考える割合が高かった。学校が行っている様々な取組みの意義や成果について、もっと生徒に発信し学校に誇りを持てるようにするべきである。 ○次年度に向けて ・地域連携は大きな成果を上げているが、さらなる広がりを期待する。 ・ユネスコスクールの取組みを周知する必要がある。 ・ＰＴＡ役員だけでなく、全ての保護者が学校の行事や取組みに積極的に参加するようにすべきである。

３　本年度の取組内容及び自己評価

	本年度の重点目標	具体的な取組内容	取組内容の自己評価
取組み①	「確かな学力の育成」への取組み ○平成２５年度からの教育課程を確定する。 ○「総合的な学習の時間」の年間指導計画を策定する。 ○自主的に学ぶ態度や習慣を身に付けさせ、生徒一人ひとりの学力を向上させる。	○教務部が中心となり、系列会議（３回）、教科会議（１７回）を踏まえ、平成２５年度からの程を確定した。 ○将来構想委員会（６回）において、「総合的な学習の時間」と１年次の「産業社会と人間」や各系列に係る教科・科目等とのつながりを明確にし、２年次から３年次へと段階的に課題解決的な学習内容を導入することとした。 ○放課後等の講習・補習において、部活動との両立を図り、学習の成果もあげるため、早朝指導を導入した。 ○生徒による授業評価を授業改善に繋げるために、６月に府教育センター「カリキュラム研究室」の指導主事を講師に職員研修をおこなった。指導助言を受けて、質問項目をいくつか変更し、学校教育目標の達成の度合いを直接に図ができるようにした。７月と１月の２回実施した。	○「実力診断テスト」「実力判定テスト」での成績を前年度より向上させた生徒の割合（３４％） ○「実用英語検定」受検者数は４名減少・合格率は１８ポイント上昇、「漢字能力検定」受検者数は２３名上昇・合格率は４ポイント減少。 ○考査前の学習時間（1学期より１０％増加）１年生の７％、２年生の３６％が増加したが、３年生の３５％は減少した。進路決定により学習へのモチベーションが低下したためと考えられる。 ○「生徒による授業評価」での肯定的な評価の割合について第１回目より５％増加をめざしたが、８４％から８７％への３％増加に留まった。
取組み②	「規律・規範の確立と豊かな心の育成」と「キャリア形成」への取組み ○教育相談体制及び支援教育体制を確立する。 ○全教職員が一丸となり、遅刻数を減らす取組みを行う ○「実践的キャリア教育・職業教育」支援事業を活用し、３年間を通したキャリア教育プログラムを充実させる	○教育相談係を教員２名とし、生徒が相談しやすくした。 ○障がいのある生徒についての個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成し、指導や評価に活用した。 ○授業遅刻時に作成する入室許可書の数により、個別の遅刻指導を行い、遅刻の多い生徒には早朝登校指導を課すなど、生徒の生活習慣改善を図った。 ○メロディチャイムを導入し、授業開始を喚起することにより、業間遅刻の減少を図った。 ○「個別のキャリア学習ファイル」を導入し、個々の生徒の進路指導の履歴を明確にすることで、担任等が指導しやすくした。 ○各教科・総合的な学習の時間・特別活動など各教育活動が、「前へ踏み出す力」「考え抜く力」など「社会人基礎力」として必要な能力要素を育むことにつながるのかを明らかにし、マトリクス化した「キャリア教育計画表」を作成した。 ○就職支援コーディネーターが生徒の面接指導や求人開拓等のための企業訪問を行い、生徒の「就職力」を向上させ、就職の機会を増やす等して、生徒の就職につなげた。	○生徒相談の充実により２学期までの中退生が昨年度の５名から３人に減少した。 ○遅刻数を前年度より１０％減少を掲げたが達成できなかった。メロディチャイムを導入したことにより業間遅刻が大幅に減少した感はあるが、遅刻常習者の増加に歯止めをかけることができなかった。 ○生徒による自己の学習の振り返りを充実させ、進路指導をより効果的にすることを目的として「個別のキャリア学習ファイル」を試行的導入段階に入った。「社会 人 基礎力」の諸能力要素の分類を利用してすべての教育活動を通じて行われるキャリア教育を「キャリア教育年間指導計画表」にまとめて活用できる体制を整えた。 ○インターンシップの導入及び応募前職場見学の充実により、生徒の職業観を深め、就業に対する意識を高めることができた。
取組み③	「家庭・地域とのつながりのある学校づくり」への取組み ○連携中学と本校の教職員の相互理解と中高連携を深化させるためのシステムを作る。 ○学校・家庭・地域が一体となった教育コミュニティづくりを進める。 ○これまでの教育成果を踏まえ、あらたに特色ある学校づくりを進める	・中学生とその保護者からの本校に対する理解を深め、入学者確保につなげていくため、授業・行事等での交流を充実させた。 ・本校文化祭で協同企画を行うなど、能勢高校を応援する会の活動を通じ、地域住民等の本校への一層の理解につなげた。 ・能勢町のＰＲを目的とし、生徒を観光甲子園に出場させ、観光協会などの行政や地域住民とのつながりを深めた。 ・能勢町の小中学校長と教育委員長、オブザーバーとしての大阪府教育委員会担当者から成る「能勢高校の将来を検討する会議」を８回開催し、本校の将来の在り方や学校像等について協議した。	○連携中学校からの本校入学者の割合 前年度より１０％増加をめざしたが、前期選抜時では前年度より１０％減少した。 ○文化祭来場者数 前年度より２０％増加をめざし、直前に町内向けに新聞折り込みを行ったが６％増に留まった。 ○観光甲子園にエントリーした。予選を突破して、１０校による全国大会（本選）に出場し、優秀作品賞を得た。プラン作成にあたり能勢町から大きな支援を受け、学校と地域が一体になった。 ○「能勢高校の将来を検討する会議」では、平成２５年度からの連携型中高一貫入学者選抜の改善策を決定することができた。また、本校及び中高連携の在り方については、協議を継続し、平成２４年度中に方針や方向性を具体化の上、大阪府教育委員会に提出することとした。